

【2011 東北・関東大震災被災地報告③宮城県の状態】

＜石巻市の状態①—被災地の中の格差—＞

盛岡から JR で一ノ関まで行き、そこから高速バスで約 80 分、仙台に到着。仙台から塩釜、松島を通過して石巻市へ向かう。報道でもよく知られている通り、石巻市は最も被害が大きい街の一つ。



避難所になっている小学校を訪問。電気ガス水道が復旧していないことは想定内だったものの、被災から 2 週間以上たった後も暖房がなく非常に寒く真っ暗な環境の中で生活していることには驚いた。これまで訪ねてきたどの避難所よりも過酷な環境だった。日没からは、個人的な懐中電灯のみの明かりで生活。日を増すごとに風邪やインフルエンザが広がっていて、体力の弱っている高齢者の方が病院へ運ばれていくという。それでも避難者の方はとても満足そうに食糧が無事届いており本当に多くの方の支援に感謝しているとしきりに伝えてくれた。が、どこかの体育館では一箱の段ボールも入らないくらい支援用の衣類が集積されているというのに、ここでは 2 週間前の被災当時に着ていた服を今も着続けているという。ここ石巻市では、被災者一人ひとりの境遇にだいぶ差がある。

津波の被害が甚大な海岸沿いの地域の中では町の規模としては特に大きい方のはずの石巻では、自衛隊や NGO だけでなく海外の救援部隊も含め多くの支援が集まっている。数百メートル離れた別の学校では電気が復旧していて避難者のために提供された灯油ストーブとテレビが各教室に一台ずつ置いてある。そこから徒歩数分の公民館は学校と違い、教室のように何部屋もあるわけではなく一つのホールに多くの方が詰めて暮らしていて、衛生環境に問題がありそうな空気を感じた。4 月以降は学校が再開されるに伴い、学校にいる避難者はこの狭い公民館に移ることになっているらしい。



どのような基準で誰がどの避難所で生活することが決定されるのか、その答えは意外とシンプルだ。自宅から最も近いあるいは偶然被災した日にその避難所に辿り着いたといった理由で、それ以上でもそれ以下でもない。数分歩いた先の避難所の方が、明らかに生活条件が良いにもかかわらず、そうした避難所に移ることができないのは何故なのか。この答えもまたシンプルで、基本的に「生活条件の良い避難所を選んで移動する」という行動原理が最初から選択肢にないようだった。もちろん皆がそうした行動原理で動いてしまうと大きな混乱が生じていただろうし、慣れた生活空間から飛び出して改めて人間関係や生活のリズムを整えるのは大きなエネルギーを消費するということもあるだろう。東京で買い占めが問題になっている時には東北にいてあまりその実態を知らないが、生活水準の低下を受け入れられない人がもしこの街にもたくさんいたのなら、避難所の運営はもっと混乱していたかもしれない。

<女川町の状況—被災地の病院の役割—>



石巻市から女川町までは車で約20～30分。石巻市街地に比べて被害がより深刻だったのかそれともまだ復興作業の手がまわっていないのか、通道路の女川街道ではまだ多くの瓦礫が道路沿いに高く積み上がっていた。女川町に着くと、新聞やテレビで映し出されている被災地の中でも最も深刻な場所情景が目の前に広がった。ただテレビと違うのは、カメラの枠外にも視界360度にわたって廃墟が続いていること。



この町を襲った津波の高さは約 30m。鉄筋コンクリートの 4 階建てビルまで横転して少し離れたところまで流されていた。これまで活動してきた場所と異なり、瓦礫が山積みになっているという状況ではなく、建物の土台以外の部分が全て流されてしまっている。地盤沈下で水没してしまった区域もある。

被災地を見渡せる高台の丘にある病院へ行くと、そこの一階も 1m 以上浸水していた。この病院では震災後も自家発電で 2 階以上が病院としての機能を継続しており、2 週間以上一日も休まず負傷者の治療や病院の運営に従事し続けている人もいる。公共施設であり多くの被災者が通院または入院するということもあり、災害対策本部や避難所と並んで支援物資が直接届けられる場所でもあり、多くの食料や衣類といった物資が連日運びこまれている。届けられた物資の運搬仕分けに苦勞しているといった、ネット上で溢れる現地の混乱ぶりが現在も進行中。運搬や仕分けの人手の他にも、置き場所の問題や空になった段ボールの処理にも困っていた。段ボールはある程度たまったらまとめて焼却しているが、この作業にも労働力と時間がかかる。人手が足りず、医師や看護師がこれら全ての作業も担っていた。この段ボールの中身たちが被災者の手に辿り着くまでに、大阪の寄付者、東京の NPO 団体、埼玉の運送会社、宮城の自衛隊、女川町の自治体、そしてこの病院の職員が関わっていると思うと、つい日本社会の深みに思いを馳せてしまう。と同時に、バランスの悪い物資の流れに多くの課題が生じていることも否めなかった。



人手不足については非常に深刻で、病院の救命・治療活動を運営と支援物資の管理に迫られる傍らで、浸水してしまった一階の整理に大きな労働力を必要と

していた。特に救急の際担架で 2 階まで患者を運ぶ時や泥まみれになった電子機器や机椅子を外へ運び出すといった作業には男手が必要だった。この病院の受付があった一階では重要なデータ管理のこともあり、濡れた書類に慎重に目を通して捨てていいものとそうでないものを確認しなければならず、作業が進むのを遅らせていた。そんな中でも患者さんが見える度に、職員の方は絶えず笑顔で接して安心感を与えていた。

29 日午後、その日中には南三陸町へ向かうことになっていたのに、街灯もなく危険ということで、日没前には病院を発つことになった。被災者の皆さんに食事は行き届いているということだったので、御礼とあって渡してくれた野菜が入った手作りのおにぎりを素直に受け取り、時間をかけて味わいながら女川町を後にした。

<南三陸町の状況―最大被害の町の避難所生活―>



29 日午後 6 時。最も被害が大きいとされる南三陸町志津川周辺に到着。宮古や石巻のように自宅や商店の瓦礫・泥を除去することで現地の方が従来の生活を再開することを前提にしている被災地と異なり、この町の被害は個人の意志でどうにかなる次元ではない。住民の半分以上の方が亡くなったか今も行方不明で、助かった方も家と職を失い移住を迫られている。被害を免れ経済活動を継続できるはずの農家や商店の方も震災に伴う諸条件の変化を受けて今後重大な経営判断を迫られるかもしれない。つまり町としての存続も難しい状態になっている。もちろん現段階では町の再建か移住かといった問いに答えは出ていない。

この周辺で最大の 1500 名が避難生活を続けているベイサイドアリーナへ。ベイサイドアリーナは、この震災がなければいわゆる税金の無駄遣いとして大いに叩かれていたであろう地域振興のための比較的新しい大規模な運動施設。ここには町役場、自衛隊、警察、消防、病院、マスコミ、海外部隊がそれぞれ本部を設置していて、アリーナの中には体育館の敷地を埋める物資量、さらに電気・暖房・トイレ・入浴・医療施設の全てが揃っている。トラックの荷台に乗せられた移動式のナイターのような照明が日没後も出入り口周辺の広い空間を強く照らしていて、文明社会が急きょ仮設されたかのようなステーションになっていた。現代社会の技術力、行政サービスのきめ細やかさ、全国からの支援、海外からの友好感情、避難者一人ひとりの誠実な気質、その全てがうまく機能してはじめて成り立つ空間だった。8時になると、班長の集合を呼び掛ける放送が施設中に響いた。避難者は各グループに分けられグループごとに班長を決めて、班員の状況確認と入浴や物資配給をスムーズに行うために適時簡単なミーティングが行われている。



その後車で10～15分ほど離れた志津川中学校や10km近く内陸にある入谷小学校にも訪問。こちらは日没後には消灯状態になる。生活に必要な物資はベイサイドアリーナからではなく、他県からの支援物資が直接ここに十分届いているらしい。入浴はグループごとにベイサイドアリーナまでバスで行く流れになっている。意外だったのは、ベイサイドアリーナに移りたいという人よりも、むしろベイサイドアリーナの人でこちらに移動したいという人ならいるかもしれない、という避難者たちの認識だ。というのも、中学校では教室に分かれてそれなりの生活空間が与えられているが、ベイサイドアリーナでは多くの機関と物資の本拠地という役割があるため避難者は基本的に廊下に段ボールを敷いて生活している。人口が密集しているだけにプライバシーの問題の他、テレビやトイレといった公共物の占有度も低く、特別に住環境が良いというわけではないようだ。



生死を分ける物資の支援が十分に行き届いた避難所では、下着類や掃除のためのゴム手袋といったあまりすぐ思いつくものではない日用品の需要が意識され始めている。とはいえ衣類や毛布といった物資は十分といえる一方で、日々消費していく消耗品については当面の必要量を確保したとしても今後いつまで支援による供給体制が続くのか、皆不安を抱えている。

<仙台市の状況—日常の風景とライフラインの復旧—>



グラウンド・ゼロの海岸線を歩いた余韻が消えないまま、南三陸町から直接仙台へ戻ることになった。東北自動車道は被災から2週間後には全面的に復旧している。仙台市に戻ると、ガス以外のほとんどのライフラインが復旧していて、日常の生活が戻りつつあった。駅周辺の町並みも27日まで営業停止しているところが多かったが、人通りの多いアーケードでは「私たちは負けない」「がんばろう東北がんばろう日本」といった横断幕を掲げて商店街を盛り上げていた。早くから24時間営業を再開していたインターネットカフェでは震災の影響でネットやテレビにアクセスできない人たちが情報収集する場としても機能していた。28日から駅前のダイエーも食料品や日用品を中心に再開し、入り口前には絶えず行列ができていた。ガスは全国から職員を集めて急ピッチで復旧作業に取り組んでいる。4月に入っても復旧には至っていないが、市内の銭湯は毎日午後3時間限定で営業している。しばらく全ての鉄道を運休していた仙台駅でも、仙台～山形間を繋ぐ鉄道ルートが4月3日に復旧を果たした。

東北地方の学生が抱える就活の悩みを共有するという主旨で東北大学の学生と会談。被災地の経済的格差を防ぐためにも、彼らの就活が不利にならないよう

に日本全体で考える必要がある。ところが、もともと東北地方の学生の 8 割は東北地方内での就職を考えていて、都心や海外の企業で働くことをあまり想定していないという。震災の影響としては、東北内の多くの中小企業が震災の影響で経営の継続が厳しくなっている状況から、傾向として大企業や公務員志望の学生が増加しているという。被災後も稼働している東北内の企業だけで失業者や学生の全てを吸収することは難しく、東北の学生は他県の中小企業や海外へ飛び出すといった根本的な人生設計の転換を迫られている。

今回話を聞かせてもらった学生は震災後真っ先にボランティアへの参加を呼び掛け、各地のボランティアセンターの指示に従って行動したり自主的に人手を必要としている場所を探して駆けつけたりしていた。将来は起業して地元の雇用を増やしたいと意気込んでいる。



文責：東 桂太